

6月定例活動

## トンボ池周辺整備 & 竹林整備



6月の定例活動は、トンボ池周辺の草刈りとヤゴの観察が定番になっており、ここ数年は「春の環境デーなごや」の行事に協賛して、活動を続けています。

今年は広報なごやの募集記事が2面のカラー版で目立つページにあったことと、COP10に向けての一般の方々の自然に対する興味が高まりつつあることのダブル効果で、なんと競争率20倍の難関を越えてめでたく参加できた7家族23名の家族を対象に、くらぶ会員を合わせた40名を超えるにぎわいの定例会となりました。

最初に全員で鎌を持ってトンボ池周辺の草刈り、夏休みに向けトンボ池の周りをきれいにし、これから始まるヤゴの観察の準備です。

子どもたちはタモを池に入れ、ヤゴや水生昆虫を探します。ギンヤンマ、シオカラ系、アカトンボ系など様々なヤゴがかかります。2週間前に観察をしたときはアカトンボ系のヤゴが多かったのに、今回はシオカラ系のほうが少し多い。また、今年はギンヤンマのヤゴがとても目立ちました。

観察のためトレーに採集したヤゴは、ほんの少しの時間なのにギンヤンマのヤゴがほかのヤゴを食べ始めており、アカトンボのヤゴが少ない理由が理解できました。特筆すべきは、水辺からヒメタイコウチが見つかったこと。トンボ池を作ってからほぼ10年がたち

ますが、トノサマガエルの復活に加え、自然がどんどん回復してきている様子を目にしていれしくなります。

ヤゴの観察の次は、ジャガイモの収穫体験です。3月に植えたジャガイモはまだ少し小さいものの、まずまずの出来。昼に竹炭でホイル焼きにして「じゃがバター」でいただきました。

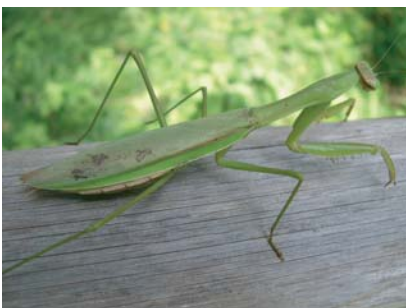
暑い日の作業で少しお疲れの様子でしたので、少し長めの昼休みをとり、午後の活動は山根口近くの竹林で雑木林に侵入する竹の除伐です。1本1本切り倒し、枝をきれいに切り落とし、所定の場所に積み上げると林の中が見違えるほどきれいになります。1時間半ほどの作業を終えてから、トンボ池で記念撮影。今年は盛りだくさんの内容で、準備に協力いただいた会員の皆さんありがとうございました。(大館)



## シリーズ『森の住人たち』②⑤

～オオカマキリ (大螳螂) ～

— 日本を代表する大型カマキリ —



花の咲き具合を見極めて、写真を撮ろうとしているときだった。逆三角形頭部の両脇の目が、じっと私を見つめた。ファイティングポーズを決めたオオカマキリだった。ふたつの鎌を、今にもそれを振り下ろさんと

構えている。吸蜜に訪れるチョウを待ち伏せていたところを、邪魔した格好だ。それにしても、花陰に上手くカモフラージュしたものである。

カマキリは日本に11種生息し、オオカマキリは日本を代表する大型のカマキリである。体色は、緑色と褐色の2種ある。雌雄でそれぞれ体長の大きさが違う。メスがやや大きく75～95mm。鎌を構えた姿は、体長以上の大きさになり、迫力満点だ。カマキリを捕まえようと手を伸ばすと、即座に鎌が動く。思わず手を引っ込めた経験を持つ。またカマキリは、オガムシともいわれる。前足を揃えた状態が拝む姿に似ていること

オオカマキリ	カマキリ科
体長	オス68～90mm、メス75～95mm
分布	北海道、本州、四国、九州に分布
食餌	チョウ、セミ、バッタなどの昆虫を捕食

から、このように呼ばれている。

ある日の観察会のこと。アブラゼミが、それまでと違う異様な声で鳴きはじめた。参加者が「あっ～、あっ～」と興奮した声をあげる。指差す方向をみれば、アブラゼミが食べられている真っ最中。ため息とともに「かわいそう～」という声も、聞こえてきた。どんな生きものも、生きていくために必死だ。

10月も半ばを過ぎると、オオカマキリの動きが緩慢になる。大抵は、大きな腹部を抱えたメス。産卵期が近づくと、秋が一段と深まる。

(文責 自然案内人 近藤 記巳子)